

いわゆる非恩恵の「-てやる」における受け手の再検討

著者	金 殷模
雑誌名	言語科学論集
巻	7
ページ	23-34
発行年	2003-12-10
URL	http://hdl.handle.net/10097/30751

いわゆる非恩恵の「一てやる」における受け手の再検討

金 殷 模

キーワード：一てやる、非恩恵、強い意志、直接受け手、間接受け手、

要 旨

一般に「一てやる」は、行為者の被行為者に対する恩恵を表すが、非恩恵を表す「一てやる」があるとされる。しかし、一般の「一てやる」も非恩恵表現も、直接受け手もしくは間接受け手が存在する構造を持つ。この基本的な構造から、非恩恵も恩恵と関係があることを論じた。また、恩恵や非恩恵とは無関係だといわれている強い意志の「一てやる」や条件節の「一てやる」も、与え手と受け手を示すことによって、恩恵や非恩恵との関係を明らかにした。

1. はじめに

授受表現には、ものの授受に関する場合と恩恵の授受を表す場合とがあるが、後者の場合、だれの行為がだれに対して恩恵的であると話し手が感ずるかに応じて、授受表現の「一てやる（あげる）」「一てもらう」「一てくれる」のいずれかが選択される。ところが、「一てやる」には、次のような非恩恵用法があるとされる。

A 腹が立ったので、怒鳴りつけてやった。

B きっと合格してやる。

このようなものが非恩恵用法とされるもので、Aが不利益、Bが強い意志と呼ばれるものである。しかし、これらは本当に非恩恵といえるだろうか。不利益・強い意志という記述説明でよいだろうか。そこで、このことを考えるために、恩恵の与え手と受け手との関係について検討を加えることにする。そして、「一てやる」が「動作の主体が他の人のためにその動作を行う」という基本義を持つということを明らかにし、これらのいわゆる非恩恵用法の位置づけをすることにしたい。

2. 先行研究

いわゆる非恩恵表現「一てやる」文の先行研究には、豊田豊子(1974)、森田良行

(2002)、庵功雄他(2002)、山田敏弘(2002)、高見健一・加藤鉦三(2003)などがある。

豊田豊子(1974)は非恩恵表現の「ーてやる」構文を、①受給関係(マイナス利益)を表す用法、②意志を表す用法、③方向を表すものの三種類に分けているが、③については恩恵的な用法との区別が明確ではないという問題点がある。寺村秀夫(1982)が日本語の授受表現を「働きかけと対面と移動の複合」の視点で観察しているように、授受表現は方向性が一緒に含まれていて、方向性だけを表す授受表現は考えにくいと思われる。また、②についても意志を表す用法が「ーてやる」だけの問題であるかどうかは疑問が残る。

山田敏弘(2002)は、授受表現の基本的な構造を直接構造(事態の項が受益者となる場合)と間接構造(事態に含まれない参加者が受益者となる場合)に分けている。そして、(動作の対象ではなく)受影者^{rel}が存在するか否かという点で、受影者存在型(非恩恵)テヤルと受影者非存在型(非恩恵)テヤルの二つに分類し、その他として事態改善用法の「ーてやる」を加えて記述している。山田のいう受影者存在型(非恩恵)テヤルは不利益の「ーてやる」で、受影者非存在型(非恩恵)テヤルは強い意志の「ーてやる」に当たる。そして、受影者非存在型(非恩恵)テヤルの場合、動作の方向性を受ける被動作主は存在し、受影者の方向だけがあり受影者は存在していないと説明している。しかし、被動作主の存在について十分説明されていないし、受影者も確実に存在しないのか、文の中で表せないだけなのか曖昧である。例えば、(1)が(2)のように非過去時は受影者の存在が感じられるタイプへとずれ込んでいると説明しているが、(1)の被動作主の存在について言及されていないし、なぜ(1)の場合は、受影者の存在が感じられないかが明確ではない。

(1) そのお金を学資にして勉強してやろう。

(2) そのお金を学資にして勉強してやった。

高見健一・加藤鉦三(2003)は、すべての「ーてやる」表現自体は利益や不利益の意味から独立しており、これらの意味は、文脈や私たちの語用論的知識に依存していると説明し、利益や不利益とは無関係の場合を取り上げ、強い意志と条件に分類して記述している。しかし、利益や不利益と本当に無関係かがはっきりしていないし、条件の用法についても説明が不十分である。

以上のように先行研究とその問題点を調べてみた。これらは、いずれも十分な説明になっているとはいえない。そこで、まず「ーてやる」構文の基本的な構造の点について考えることを通し、不利益を表す用法での利益との関連性と、強い意志を表す用法での利益や不利益との関連性を明らかにしたい。

さて、これらの先行研究を総合してみると、非恩恵表現の「一てやる」構文は次のように三つに分類できるといえる。そこで、4では、この分類にしたがって非恩恵の「一てやる」を検討していくことにする。

A 不利益を表す用法

(3) 腹が立ったので、怒鳴りつけてやった。

B 強い意志を表す用法

(4) きっと合格してやる。

C 条件節で使われる用法

(5) この電球に電流を送ってやれば、あちらの電球も一緒に点きます。

3. 恩恵の「一てやる」構文の受け手について

ところで、一般に「一てやる」は、相手に恩恵や非恩恵を与える表現で、恩恵や非恩恵の関係を明らかにするのは、「一てやる」を理解するために重要な所である。そこでまず、一般的な「一てやる」について、恩恵や非恩恵の関係を確認しておくことにする。恩恵と非恩恵の関係を明らかにするためには、その恩恵や非恩恵を受ける側について確認する必要がある。例えば、「花子に本を送った」には、行為者の意図（ある具体的な目的（目標）に限定された意志のあらわれ）が表されていない。つまり、なぜ花子に本を送ったかが分からない。ところが、「花子に本を送ってやった」になると、「一てやった」により、「花子のため」という行為者の意図が表されるようになる。このように受け手というのは与え手の恩恵という意図を表すために重要な点になる。

まず、恩恵用法の受け手について調べ、「一てやる」の基本構造を確認した後、非恩恵の受け手と比較することにより、非恩恵の意味を確認したい。

「一てやる」文は、基本的に行為者（与え手）、被行為者（受け手）、行為で構成されていて、話し手と聞き手が存在し、同時に恩恵の受け手を持ち、恩恵の授受を表す。被行為者は恩恵を直接に受ける場合もあるし、間接に受ける場合、つまり行為者が被行為者に直接に働きかけない場合もある。そこで、ここでは行為と恩恵を直接受ける側を直接受け手と、恩恵だけを間接に受ける側を間接受け手と呼ぶことにする。間接受け手はよく「一のために」「一の代わり」などで表示される。(6)の「花子」が直接受け手であり、(7)の「花子」は間接受け手である。

(6) 私は 花子を 褒めてやった。

(与え手ー私 直接受け手ー花子 行為ー褒める)

(7) 私は 花子のために 走ってやった。

(与え手ー私 間接受け手ー花子 行為ー走る)

次の(8)のように与え手(行為者)の行為を、直接受ける側と間接的に受ける側がある場合もある。また、(9)のように与え手と間接受け手が同一である場合が考えられる。

(8) 私は 花子の母のために 花子を 褒めてやった。

(与え手ー私 直接受け手ー花子 間接受け手ー花子の母 行為ー褒める)

(9) 私は 実は 自分のために 花子を 褒めてやった。

(与え手ー私 直接受け手ー花子 間接受け手ー私 行為ー褒める)

さらに、与え手と直接受け手が同一である場合もある。

(10) 自分で自分を褒めてやった。

(与え手ー私 直接受け手ー私 行為ー褒める)

与え手と受け手が同一である場合は、次の(11)(12)のように、与え手の体や所有物が利益の対象になる時によく見られる。この場合、受け手はノ格で表すことになる。

(11) 花子は自分の皮膚のために毎日ビタミン C を摂ってやった。

(与え手ー花子 直接受け手ー花子 行為ービタミン C を摂る)

(12) (自分の) 靴をきれいに磨いてやった。

しかし、(11)(12)の場合、所有者を考えずに、ただモノに対して「一てやる」文を使う時もある。「一てやる」文は、与え手の意図を表す表現で、受け手の気持ちは推測できるだけである。ただ、モノを受け手と考えることにも無理はないが、本来「一てやる」文は対人関係を表す文であることを考えてみれば、そのモノは擬人化されていると考えた方がよいだろう。与え手の受け手に対する意図は変わらない。例えば、次の(13)は、「部屋」が擬人化されている。

(13) この部屋、きれいに掃除してやる。

(与え手ー私 直接受け手ー部屋 行為ー掃除する)

以上のように、一般的な「一てやる」は、基本的に与え手と受け手を持つ。また、受け手は行為と恩恵を受ける直接受け手と、恩恵だけを受ける間接受け手に分けられる。間接受け手は、直接受け手がない場合や、直接受け手がいても間接受け手が同時に存在する場合に表れる。さらに、与え手と受け手が同一である構造を持つ場合もあり、擬人化されたモノが受け手で表れる場合もある。それでは、上で調べた受け手の構造を基本にし、非恩恵表現の「一てやる」文について見てみよう。

4. いわゆる非恩恵の「一てやる」構文の受け手について

4-1 不利益を表す「一てやる」構文の受け手

不利益を表す文は不利益の受給なので、いわゆる強い意志「一てやる」のように受け手の存在は問題にならないが、本当に不利益だけを表すといえるだろうか。このことについて、上のような捉え方によって確認したい。上のような捉え方をすると、利益を表す「一てやる」に直接受け手と間接受け手とが存在するように、不利益を表す「一てやる」にも、行為と不利益を直接受ける直接受け手と、不利益を間接に受ける間接受け手とが存在するといえることができる。

(14) 彼の書類を破り捨ててやる。

(与え手—私 不利益の直接受け手—彼 行為—破り捨てる)

(15) 東京に逃げてやった。

(与え手—私 不利益の間接受け手—ある人 行為—逃げる)

しかし、不利益を表す場合は、もう一方は利益を受ける側が存在することになる。(14)の場合、(14)'のように、利益を受けることを表す「花子のために」、つまり利益の間接受け手を加えても文は成立する。

(14)' 花子のために (のかわりに) 彼の書類を破り捨ててやった。

(与え手—私 不利益の直接受け手—彼 利益の間接受け手—花子)

(14)' は、(8)のように、利益の「一てやる」が、直接受け手と同時に間接受け手を持つ構造は同じだが、受け手が利益の受け手と不利益の受け手に分かれて存在するのが異なってくる。

また、(9)と同じように、間接受け手である利益の受け手が自分である場合も考えられる。例えば、「自分の気を晴らすために彼の書類を破り捨ててやった」のように「自分のために」を入れて考えると、相手に対する行為は自分のためになるわけである。次の(16)を見てみよう。自分の「自信回復のために」という利益の受け手が思われる。

(16) ともあれ、自信回復のためには、数学で見返してやるしか他にないことは明らかだった。

(藤原正彦「若き数学者のアメリカ」)

したがって、(14)(15)の場合、(14)には利益の間接受け手が与え手で、(15)には、利益の直接受け手が与え手であるといえる。再び、(14)(15)の与え手と受け手の関係を整理すれば、次のようになる。

(14) 彼の書類を破り捨ててやる。

(与え手—私 不利益の直接受け手—彼 利益の間接受け手—私)

(15) 東京に逃げてやった。

(与え手ー私 不利益の間接受け手ーある人 利益の直接受け手ー私)

利益の「一てやる」では、利益を受ける間接受け手を表示する時「一のために」を用いればいいが、不利益を受ける間接受け手の場合は、「一のために」を用いれば利益を受けることを表してしまい、不利益を表せないで、不利益を受ける間接受け手を表す方法がなくなる。それで、(15)のような場合には、文の中に受け手を表せないようになる。受け手を表すためには、「太郎を困らせるために」のような句を入れると、不利益の対象が表せるようになる。

また、利益の「一てやる」(10)のように、不利益の場合も不利益を受ける側と与える側が同一の場合もある。この場合には、不利益の直接受け手が同時に利益の間接受け手にもなる。

(17) 罪だ？ よろしい、ぼくは自分を罰してやる。

(高橋義孝訳「若きウェルテルの悩み」)

(与え手ー私 不利益の直接受け手ー私 利益の間接受け手ー私
行為ー罰する)(18) だって現にこのわたしがどん底におちたとき、先ず自分で自分を辱しめ
てやろうと思いましたものね。 (工藤精一郎訳「罪と罰」)

不利益の場合も受け手がモノである場合が考えられる。

(19) この椅子、壊してやる。(与え手ー私 不利益の直接受け手ー椅子 利益の間接受け手ー私
行為ー壊す)

与え手の気分を晴らすためだという意図は変わらない。

以上、不利益を表す「一てやる」も、利益を表す時の「一てやる」構文の基本構造と変わりはないことを確認した。ただ、利益の「一てやる」は、直接受け手も間接受け手も利益を受けているが、不利益の「一てやる」は、直接受け手あるいは間接受け手が不利益を受けることと、直接受け手あるいは間接受け手が不利益を受ける場合、もう一方に直接あるいは間接に利益を受ける側が存在することが違う。つまり、直接受け手が不利益を受け、間接受け手は利益を受ける構造と、また、不利益の受け手が間接受け手の場合、もう一つの利益の直接受け手が存在する構造があるのである。したがって、不利益を表す「一てやる」は、不利益の受け手だけではなく、利益の受け手も共存することが分かった。

ところで、(15)の場合、4-2で述べる(20)'と同じ構造を持つことが分かる。

そこで、不利益用法と同じ構造を持つ強い意志の「一てやる」の受け手を確認しながら、強い意志の「一てやる」の受け手について調べてみよう。

4-2 強い意志を表す「一てやる」構文の受け手

先行研究で強い意志を表す表現として説明される文は、相手に対する働きかけがない、つまり行為の受け手がない文で、恩恵や非恩恵と関係ないとされている。しかし、それを強い意志と分類し、区別することには問題があるのではないかと。まず、「一てやる」の基本構造をみることによって、受け手について調べてみることにする。

先行研究で強い意志に分類される「入賞する・生き延びる・勝つ」のような動詞は、自分が自分に対しての動作であり、方向性もない動詞であるが、「一てやる」によって、間接受け手が考えられるようになる。例えば、(7)や(15)のように「一のために」で間接受け手を表すことができる。さらに、主体の行為は実は主体の利益であるので、利益の直接受け手は主体つまり与え手になると思われる。

(20) あなたのためにきっと入賞してやる。

(与え手—私 利益の間接受け手—あなた 利益の直接受け手—私
行為—入賞する)

(21) 花子のために太郎にきっと勝ってやる。

(与え手—私 利益の間接受け手—花子 不利益の直接受け手—太郎
利益の直接受け手—私 行為—勝つ)

「入賞する・生き延びる・勝つ・受かる・死ぬ」のような動詞は自分が自分に対してする行動である。このような種類の動詞は、3と4-1で触れた「走る・逃げる」のような動詞のように、受け手は「一のために」のような間接受け手の形式で表されるようになる。しかし、「走る・逃げる」はその動作が自分の利益かどうかははっきり分からないが、「入賞する・生き延びる・勝つ・受かる」のような動詞は自分の利益になる動作といえるということである^{注2}。

また、利益の直接受け手が私であることを除けば、(20)は利益用法に近いし、(21)は不利益用法に近くなる。しかし、(20)(21)の場合、「一のために」がないと、行為は与え手の利益であり、受け手の不利益になる文になる。

(20)' きっと入賞してやる。

(与え手—私 不利益の間接受け手—ある人 利益の直接受け手—私)

(21)' 太郎にきっと勝ってやる。

(与え手ー私 不利益の直接受け手ー太郎 利益の直接受け手ー私)

これらは「自分のために」を入れることもできる。しかし、「入賞する・生き延びる・勝つ」のような動詞は、自分が自分に対しての動作なので「自分のために」をいれても、与え手と受け手の関係は、(20)' (21)' と同じ構造を持つ。(20)' (21)' は「自分のために」が省略されたとも思われる。

(20)' の場合、4-1でも説明したように不利益の受け手の表し方の問題で、不利益の受け手は存在するが、表し方がなく、表そうとすれば他の言い方が必要になる。「入賞する・生き延びる」行為は、結局行為者(与え手)の利益であり、それが「一てやる」によって不利益を受ける間接受け手が考える文になる。この場合の不利益というのは、相手を困らせたり見返したりする間接の働きになる。(21)' の場合は、「勝つ」動詞が「に」格を取れるので、不利益の受け手を表すことができるのをみれば、(20)' も、単に受け手がないとはいえない。

また、受け手が人ではないモノの場合も考えられる。

(22) こんな大学、受かってやる。

この場合、受け手は大学になり、与え手の不利益の意図は変わらない。

また、受け手に不利益を与えるために自分に不利益を与える場合もある。「死ぬ・落ちる」も「入賞する・生き延びる」のように、自分が自分に対してする行為であるが、自分に不利益になるのが違ってくる。

(23) そんなこというなら、死んでやる。

(24) 試験に落ちてやる。

ところで、意志というのはそもそも「一てやる」の問題ではないと考えられる。先行研究で「合格する・入賞する・勝つ・死ぬ」のような動詞が先行動詞である時、「一てやる」構文は強い意志に分類されてきた。このような動詞は、その結果に至るまでの主体の意思的努力の如何にかかわらず、最終的には主体の意志・自己制御性の埒外にある無意志動詞であり、「一てやる」により、意志化されると言われてきた。たしかに「一てやる」は非行為者に利益か不利益を与える行為者の意図を表す役割を持っているので、「一てやる」が意志機能を持っているといえる。しかし、それは、「一てやる」が利益か不利益かを与える意志を表す機能で、無意志動詞を意志化するとは言にくい。

「意志」ということについては、宮崎和人(2002)は、意志を表す「する」を、＜意志の宣言＞と＜決意の確認＞に分けている。例えば、「きっと合格する」と「きっと合格してやる」とを比べてみよう。この説明によれば、「きっと合格する」も

「きっと合格してやる」も＜決意の確認＞である。それに、「きっと合格してやる」は行為者の意図が加わるようになる。このように、意志というのは、「する」の問題であり、授受表現「一てやる」の問題ではないということが分かる。「一てやる」には、「一てやる」が持っている独自の機能がある。

以上、強い意志というのはそもそも「一てやる」の問題ではないことと、「一てやる」の与え手と受け手の基本構造に従い説明することにより、いわゆる強い意志を表す「一てやる」にも利益と不利益を表す面があることが分かった。そして、不利益を表す面があるということは、Aと同じだと思うが、Aの場合は直接受け手が不利益の受け手になり、Bの場合は、間接受け手が不利益の受け手になるということであろう。次に条件節の「一てやる」の恩恵や非恩恵の関係を調べてみよう。

4-3 条件節の「一てやる」構文の受け手

山田(2002)は、条件節で使われる「一てやる」用法を事態改善用法の「一てやる」といい、何らかの事態の改善が示される点で恩恵的な意味に近い用法と考えられると記述している。次の例を見てみよう。

(25) この文に文脈を与えてやると、大分適格性があがります。

この場合は「一てやる」文の受け手がモノになる場合と思われるが、文全体として見るとその行為をした人、すなわち行為者(与え手)が求めた結果を得るという利益を受けることになると思われる。次のように「あなた」を受け手として考えることができるのである。

(25)' あなたの文に文脈を与えてやると、(あなたの)文は大分適格性があがります。

(与え手—あなた 直接受け手—あなた 行為—文に文脈を与える)

次の例は「一てやる」文の受け手がモノではない場合である。

(26) 子供をよく褒めてやると、自信のある人に育てることができる。

(与え手—あなた 直接受け手—あなた 行為—子供をよく褒める)

(27) 癪に触る時は怒鳴りつけてやれば、すっきりする。

(与え手—あなた 直接受け手—あなた 行為—怒鳴りつける)

(26)は、「一てやる」文だけみると、受け手は「子供」になるが、全体的にみると「子供をよく褒めてやる」人が「自身のある人に育てることができる」ということで、つまり、褒めてやる人が望む結果を得るという利益を受けると言えるのではない。「あなたがあなたのモノ(人)に一してやると、」のように、行為者が聞き手

で、聞き手と与え手が同じ場合だと思われる。(27)も、怒鳴りつけてやった人がすっきりした気分を感じる。つまり、すっきりした気分を感じる利益を受けると思われる。

以上、いわゆる非恩恵表現「一てやる」の受け手の存在について調べてみた。不利益の「一てやる」は、受け手が直接受け手と間接受け手に分けられる。さらに、間接受け手は不利益の間接受け手と利益の間接受け手に分けられる。強い意志の「一てやる」は、与え手と利益の直接受け手が同一であり、不利益の受け手が直接あるいは間接に受ける側が存在する。また、条件節の「一てやる」の場合は、行為者つまり与え手が利益の受け手になる。その結果、非恩恵用法のそれぞれに利益の受け手があることが分かった。また、強い意志というのは、そもそも「一てやる」の問題ではないので、強い意志に分類されるのは問題があることを明らかにした。

ここまでみた「一てやる」の与え手と受け手の利益あるいは不利益の関係を、松下大三郎(1928)の文法用語を用いて整理してみれば次のようになるだろう。(自行一己の働きかけ、自利一己の利益、他利一他人の利益)

- | | |
|----------------|-----------------------------------------------------------------|
| a. 恩恵の「一てやる」 | 自行他利(6)(7) 自行他利他利(8)
自行自利他利(9) 自行自利(10)(11)(12) |
| b. 不利益の「一てやる」 | 自行自利他不利(14)(15) 自行他利他不利(14)'
自行自利自不利(17)(18) |
| c. 強い意志の「一てやる」 | 自行自利他利(20) 自行自利他利他不利(21)
自行自利他不利(20)' (21)' 自行自不利他不利(23)(24) |
| d. 条件節の「一てやる」 | 自行自利 |

5. 「一てやる」構文の機能

さて、このような「一てやる」構文は文全体としてどのような働きをするのだろうか。これまで述べてきたことをまず振り返ってみる。「一てやる」のない「花子に本を送った」には行為者の意図が表されていない。しかし、「花子に本を送ってやった」になると、「一てやった」により、「花子のため」だという行為者の意図が表されるようになる、という働きをするのが「一てやる」の基本的な機能であった。

このように「一てやる」には与え手の意図を受け手に伝える機能を持っているので、「一てやる」がないと与え手の意図が伝わらなくなる。この意図は他の表現では目的ともいえる。つまり、「一てやる」をつけることにより、どういう目的で行為者がその行為をしたかが分かるようになる。その意図は大きく二つに分けること

ができる。受け手に利益を与える時は、与え手はプラス感情（好意、思いやり、愛情、配慮...）をもって受け手を助けるために、愛するために、喜ばせるためにやるのだという意図が考えられるし、不利益を与える時には、与え手はマイナス感情（恨み、怒り、仕返し...）をもって受け手を困らせるために、悔しく感じさせるために、また、与え手の気を晴らすためにやるのだという意図が考えられる。今まで受け手について調べてきたが、その受け手に対するこのような意図を、与え手は「一てやる」の基本義をもとにして文脈や場面、状況などに依存しながら、それぞれ表しているといえる。

さらに、次の例文を比べてみよう。

(28) このペット、もらってくれる。

(29) このペット、もらってやってくれる。

「もらってやってくれる」の方が頼む側が弱くなる感じがする。これは、利益と不利益の関係と共に「一てやる」が持っているもう一つの機能を考えさせてくれる。

「一てやる」の場合、行為者は被行為者より上になり、強い立場になる。つまり、行為者はしてやれる立場として被行為者よりはある意味では上になる。行為者は主体として行為の主導権を握っているのである。したがって、恩恵を表す時、場合によって、「一てやる」構文が恩着せがましく聞こえやすくなるし、また、不愉快を感じさせやすくなる。そして、「征伐する、勝つ、受かる」などのような自分の意志でできない動詞類は、「一てやる」により、自分が強い立場だということを表し、相手を見下していながら、それが自分にはできるという自信を表すようになる。これもまた、文脈や場面、状況などに依存した語用論的機能であるといえるだろう。

6. まとめ

これまでの結果をまとめてみると、次のようになる。

- ①「一てやる」文は、対人関係を表す表現であり、相手を意識してから用いる文なので、文の中で受け手が表せない場合でも意味的には受け手は存在する。受け手は間接受け手と直接受け手とがあって、利益の受け手と不利益の受け手が共存することもある。また、与え手と受け手が同じ場合もある。
- ②「一てやる」文は、受け手に対して直接であれ間接であれ不利益を表しても、共に利益と関係がある。
- ③不利益を表す「一てやる」文は不利益の受け手が直接受け手になるが、強い意志を表す「一てやる」文は不利益の受け手が間接受け手になる。また、そ

もそも強い意志というのは「一てやる」の問題ではないので、別に強い意志と区別しなくてもいいのではなかろうか。

- ④「一てやる」は、利益と不利益の関係を持つことから、「一てやる」構文の行為者は主体として行為の主導権を握る。そのために、場合によって、相手を見下し、恩着せがましく聞こえやすくなるし、また、不愉快を感じさせやすくなる。これは、文脈や場面、状況などに依存した語用論的な機能である。

今後は、非恩恵を表す「一てもらう」「一てくれる」の用法と意味について考察したいと思う。

注

1. 山田は、恩恵の受け手を受益者と、行為者の動作の対象ではない、非恩恵の受け手は受影者を名づけている。
2. 「勝つ、受かる」という動詞は、自分が自分に自分の利益になると、強い意志に分類されてきた。そうであれば「走る」も自分が自分に自分の利益になる時は強い意志になるはずだが、そう分類していない。そういう強い意志という分類はやはり問題であると思われる。

参考文献

- 庵功雄他 2002 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 井島正博 1999 「魚は三枚におろしてあげます ―＜配慮・気配り＞を表すテヤル・テアゲル―」『日本語学』18・12
- 高見健一・加藤鉦三 2003 「受益表現の新展開 2」『月刊 言語』32・2
- 寺村秀夫 1982 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 豊田豊子 1974 「補助動詞「やる・くれる・もらう」について」『日本語学校論集』1号
- 二宮喜代子 2002 「日本語学習者の授受補助動詞の習得における問題点」『山田国文』25
- 松下大三郎 1928 『改撰標準日本文法』中文館書店
- 宮崎和人 2002 『モダリティ』くろしお出版
- 森田良行 2002 『日本語文法の発想』ひつじ書房
- 山田敏弘 2001 「日本語におけるベネファクティブの記述的研究」(第6回)『日本語学』20・4
- 山橋幸子 2002 「補助動詞「(て)やる/あげる」考」『比較文化論叢』9